英語教育を柱とした小中間における協働の在り方

―授業観，指導観の共有を通した「協働の文化」の創造―

矢野　司　　高度教職開発コース

キーワード：小中協働，授業改善，教科会運営，学校組織マネジメント

１．はじめに

本報告書は，以下の内容で構成していく。第２節では，信州大学教育学部附属長野中学校（以下長野中学校）に赴任してからテーマ設定に至るまで，私が取り組んだことや感じていた課題を中心にまとめている。第３節では，教職大学院一年目の取り組みについて主に「三本の柱」を中心に報告していく。一つ目の柱は，私自身の「授業改善」のきっかけに至った事例を中心にまとめていく。二つ目の柱は,「指導観の共有」を目指した「教科会運営」の内容について述べていく。三つ目の柱は「学校組織マネジメント」をテーマに，小中間における協働に向けた取り組みについて事例を述べていく。第４節では，一年目の取り組みを基に実践した二年目の取り組みについて述べていく。そして，第５節では，実践事例や考察から見えてきた「小中間における協働の在り方」について私なりの考えを述べていく。

２．信州大学教育学部附属長野中学校に赴任してからテーマ設定に至るまで

小学校教諭として八年間勤めてきた私が，長野中学校に赴任してから最初の二年間は，「英語科の教師になる」ための時間であった。日々時間を見つけては，同僚の授業を観察して自分の実践に生かす日々が続いた。三年目を過ぎた頃，各々がもつ高い実践力を共有する場がないかと感じるようになった。そこで，わずかな時間で定期的に教科会を位置付け,「Lesson Plan」の共有,「CAN DO リスト」の作成に取り組んだ。それらの情報交換を通して，教科内に「授業観」や「指導観」について語り合う機会が頻繁に増え,「チーム」として組織されることで教育力が格段と向上することを実感した。一方で，小学校で長く勤務してきた私にとって中学校と小学校が情報交換をする機会が少ないことが気になっていた。特に，同じ学校園で併設する信州大学教育学部附属長野小学校（以下長野小学校）からは，毎年学年の四割程の児童が入学してくるが，互いの情報を共有する機会は極めて少ない。中学校では，学習指導要領を基に「つける力」を明確にした授業を目指し，小学校では，教師自身が自分たち自身のからだに目を向けながら子どもと共に生きる道程を探求している。共に目の前の子どものために自身の教育について追究するが，その内容を知る機会は両校の公開授業のみである。そこで，大学院での本実践研究に関して，本格的に始まる英語教育の改革を前に，長野小学校・長野中学校の連携について英語教育を切り口にすることで,「授業観」や「指導観」を共有し互いに高め合える「同僚性」を築いていきたいと考え,「英語教育を柱とした小中間における協働の在り方」と自分の課題を設定した。

３．一年目の取り組み

一年目の取り組みは，三本の柱としてまとめられる。「授業改善」と「教科会運営」と「学校組織マネジメント」である。ここでは，それぞれの事例と省察をまとめる。

3.1 授業改善：「授業観」の問い直し

「英語の授業で英語を使用することは当たり前なのか」連携の一環として私が指導することになった小学校の実践（2016 年５月 20 日）において，教師の制止を振り切って日本語でインタビュー活動を続けるM児の姿を目の前にして，この問いを抱かざるを得なかった。一見成立しているように見えている中学校の英語の授業も，生徒が付き合ってくれているだけなのかもしれないと考えた。この事例は，改めて自分の「授業観」を問い直すきっかけになった。

3.2 教科会運営：「指導観」の共有

2016 年は，年間五回の小中合同教科会を設けた。第二回小中合同教科会（2016 年８月２日）では，小学校においては，毎年英語の専科教員が変わり，学級の実態をあまり理解しない中，日々の授業実践に苦しんでいる小学校英語の現状を共有した。

８月の小中合同教科会で共有した両校の課題を基に，第四回小中合同教科会（2017 年１月 24 日）では，カリキュラムの作成に向けて酒井先生よりご指導をいただきながら話し合った。毎年変わる英語専科の先生が苦しんでいる状況を毎年目にしていることを考えると，どのように学びの足跡を残していくのか考えていく必要がある。その解決の手立てとして，酒井先生からご指導いただいた，言語コミュニケーション能力と対人コミュニケーション能力の二つを付けたい力を軸に配列を考えていくことで，小中をつなぐカリキュラムとなり，「指導観」の共有ができるのではないかと考えるきっかけとなった。

3.3 学校組織マネジメント ：「授業観」と「指導観」の共有

独立行政法人教職員支援機構において開かれた学校組織マネジメント研修（2016 年 10 月 24 日～29 日）に参加した。私が一番印象に残っているのは，「『チーム学校』へ転換するのにあたり大切なことは『協働の文化をマネジメントすること』」という言葉だ。ここで言う協働とは，教員間の協働，学校と地域との協働，子どもの協働など様々な意味があるのだと思う。小中協働においても，この「協働の文化をマネジメントすること」が手がかりの一つになりそうだと考えた。

学校組織マネジメントで得た知見や教職大学院の取り組みについて本務校内で実践発表（2016 年 12 月 19 日）する場をいただいた。その内容は，「小中合同教科会の様子」「カリキュラム構築の過程」「小学校実践の苦悩」についてである。その後，５名程のグループを作り「小中連携の在り方」について議論し合う時間を取った。先生方との議論の中で思ったことは，小中協働がなかなか進まない現状の背景には，その目的が見えづらいことが理由として挙げられる。小中協働の場を特別位置付けることがなくても，困ることがなく学校生活が送られてきた現状を考えると，明確な目的意識を両者が共有する必要がある。また，九年間を通してどのような児童・生徒を育んでいくのか「指導観」を共有していく必要も感じている。その理想を描くからこそ，どのような学習内容を展開していくのか考えがもてるのだと思った。

3.4 一年目の取り組みを振り返って

小中学校で実践を積み重ねる中で，自分の「授業観」という視点から，「英語を使う必要感のある授業」が大きな課題であることを実感した。また，小中の教科会を位置付けていく中で，どのような子どもを育んでいくのか，互いの学校の願いはあるがそれが共有化されておらず，また小中九年間でどのような子どもを育ていくのか共通のビジョンが必要であることが見えてきた。この一年間長野小学校で授業をする中で見えてきた，小学校の目指す方向性やその価値を積極的に中学校にも発信していきたいと考えた。

４．二年目の取り組み

一年目の実践を踏まえ，二年目に取り組んだ二つの事例と省察をまとめる。

4.1「英語を使う必要感のある授業」に向けて

New Crown 3 Lesson 1 で，クミとエマが学級目標について語り合う場面がある。クミはその対話の中で，“It reminds us the importance of friendship. It’s perfect for our class.”と述べる。私が担任する学級は，昨年理想の学級像について話し合いを重ね，抽出したキーワードの頭文字を基に学級目標を「A yano」とした。４月，クミとエマの対話を学ぶ中で生徒たちに“Kumi said, ‘It’s perfect for our class.’ How about your class motto A yano? ”と投げかけた。すると，学級 41 人中 Perfect と考えた生徒が 15 人，Not perfect と答えた生徒が 26 人であった。その後，“Should we keep “A yano” this year? ”と発問すると，学級目標に愛着を感じていたK生は，自分の考えを英語でまとめ積極的に英語で討論する姿が見られた。そして，単元を振り返って「英語で会話を続ける中で，もし文法などがあっていなくても『伝えよう』という気持ちで様々な説明をすると分かってくれたから，その気持ちを大切にしてコミュニケーションをしていきたいと思った」とまとめた。感想の中で，K生が,「文法を気にせず様々な説明をしよう」という気持ちになぜなれたのだろうか。それは，K生の生活の一部となっていた学級目標を今後どうするかという問いは，K生にとって考える必要感があったと推察される。そして，教科書の場面と実生活をつなげたことも手だてとなったと考えられる。この実践やK生の姿から，教科書の内容から生徒の実生活に根差した学習場面や問いを設定することで,「英語を使う必要感のある授業」ができることが示唆された。

4.2 小中間協働に向けた取り組み :「指導観」を共有する

Three Robbers（「三人の泥棒たち」という意味）この英語の絵本の日本語版タイトルは『すてきな三人組』。日本語版，英語版の題名から受ける印象は大きく異なってくる。「泥棒は悪党であるから英語版が相応しい」と考える ALT に，日本語で共感や反論をしていく６年生。考えが深まっていけばいくほど,「英語で伝えたいという願いがあるのだが技能が追いつかない」このジレンマから日本語を多用して，私が英訳して ALT に伝えていく展開に授業の雰囲気は停滞し始めていった。私自身，どのようにまとめていくべきか迷っていた時，６年生の学級担任がジェスチャーを使いながら ALT に語りかけた。「『すてきな三人組み』 is good because…だって泥棒なのに無欲ですてきでしょ…」英単語とジェスチャー，時折日本語を交えながら自分の思いを伝えようとする学級担任の姿に６年生の子ども

たちは惹きこまれていった。その後，議論は再び活発になり，Y児は「I think *Three Robbers* are good. Robbers are bad people.やっぱり泥棒はよくないよ」と James 先生に伝えることができた。このY児の姿は，「英語を使いこなそうとする」のではなく「英語を通して ALT と心を通わせようとした学級担任の姿」が手だてとなったのではないかと推察される。授業後，英語専科教員，学級担任と授業を振り返る中で，この授業のような言語活動を成立させる上でどのように英語の技能を習得させていくかが話題となった。専門教科が体育科である学級担任も体育の授業における「技能習得」における課題意識を感じていた。二年間教科会の運営について考えてきたが，専門性が異なった分野や他教科の先生方と「指導観」を共有することで，新たに示唆されることがあることを実感した。

4.3 学校組織マネジメント ：「授業観」と「指導観」の共有

「小中協働」における取組みを英語科のみならず他教科に広げ，学校全体の動きとして考えていく必要がある。中学校の同僚の中には，「小中協働」の取り組みに共感を示してくれる職員がいる。今後は，このような同僚が小学校で授業ができる場をコーディネートしていきたいと考える。また，小学校の職員が中学校の授業で共に指導できる場も設定していきたい。このように，互いに「授業観」や「指導観」を共有し合える場を設定していくことで，より豊かな教育は実現していくのかもしれない。

５．二年間の取り組みを振り返って

二年間の実践を通して「英語教育を柱とした小中間における協働の在り方」とはどのようなものか,取り組んできた三本の柱に対応する形で今の自分の見解を述べていきたい。

一つ目は，英語の「授業観」についてである。社会のグローバル化が急激に進む中，「聞く・読む・話す・書く」といった英語能力が求められる機会が増してくるであろう。しかし，四つのこれらの英語能力の定着が目的であってはならない。もちろん，英語能力の定着も大切であるが，最も大切なのは，英語能力を通して「他者とどのように心を通わせていくのか」言わば「相互理解」だということを二年間の実践を通して学ぶことができた。

二つ目は,教科会運営についてである。二年間数多くの小中合同教科会を通して，それぞれの異なった文化の中で「指導観」を共有し合い，大切なのはカリキュラムなど形を整えることではなく，作成したカリキュラムを基に「考えを共有し合うこと」であることを実感した。 カリキュラム・マネジメントの３つの側面の一つとして掲げられている「PDCA サイクルを確立すること」が重要であり，特に今後においては作成したカリキュラムをいかに振り返り（C），次の行動（A）につなげていくかが課題となる。

最後に，今後の課題としてこの「小中協働」に向けた取り組みを英語科のみならず他教科に広げ，学校全体の動きとして考えていくことが三本目の柱に繋がる部分であろう。改訂される学習指導要領の理念に「社会に開かれた教育課程」が掲げられている。「教科」「学校」といった「枠」にとらわれず，まずは我々教師が協働していくことが「社会に開かれた教育課程」に向けた大きな一歩になると私は考える。